高山の町並み

歴史的に、高山周辺の山地は、稲作には適していないとされてきた。米は主な納税手段として使われていたため、飛騨地方は特別に、米の代わりに労働力を納税することを認められた。8 世紀初頭、日本の初期の都では、飛騨の職人が木造建築に従事していた。その後何世紀にもわたって、この地域は大工や木工職人で知られるようになった。

1586 年までに飛騨の権力は金森長近（1524-1608）に集約され、彼の城を中心に高山の町が発展した。5 つの主要道路が交差するロケーションは高山の商人たちにとって都合がよく、彼らは金森家の統治のもとで富を築いた。

1695 年、徳川幕府は飛騨を直轄地とした。金森家の藩主やその家臣たちは飛騨の地を離れ、高山は商人や職人の街となった。その結果、高山の美しい町並みは、ほとんどが江戸時代（1603-1867）に商人や職人が住んでいた町家で構成されている。

高山の火事は、密集した木造家屋の中で瞬く間に広がり、壊滅的な被害をもたらしていた。1729 年から 1832 年の間に、高山の大部分が焼失し、再建されたことが 5 回もあった。1783 年には消防団が結成されたが、主な消火方法は燃えている家の周囲の建物を破壊することであった。貴重品を守るために、裕福な家は耐火性の土壁を持つ大きな蔵を建てた。